# 褒美としてお主を男にしてやるぞ

※小説　木森山水道（夜山の休憩所）

「ご挨拶」
この度は、ＤＬ＆ご観賞くださいまして誠に有難うございます。
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

「製品版と体験版の相違点」
体験版の挿絵はモノクロですが、製品版はカラーとなっております。
また、製品版には体験版の続きの内容が収録されております。

「ご注意ください」
・ＰＤＦ閲覧ソフト（Adobe Reader７と９とＸで確認済み）によっては「見開き」で見る際、ページが右から左へ進みます。
・本製品はフィクションです。個人の範囲でお楽しみ下さい。

目次

第一話　褒美をとらさねばなるまい　……3
第二話　お主の恩返しは、女の喜びを教えることじゃ　……26
第三話　これからこやつの尻を犯せ　……48
第四話　天晴れな活躍じゃったぞ。もう立派な牡じゃな　……82

## 主な登場人物

天野　勇（あまの　いさむ）　十九歳の大学一年生。自分に自信がない。

天女（あまめ）　勇の大学」に祭られている気さくな道祖神。勇を気に入る。

冴（さえ）　読書少女的な容姿の柱。脳を活性化させる力を持つ。天女の知り合い。

シンディ　浅黒い肌の金髪美人。女としての自信に溢れている。

西園寺　剛（さいおんじ　ごう）　十八歳。才色兼備で金持ち。勇を見下している。

# 第一話
# 「褒美をとらさねばなるまい」

「天野センパイ、これから暇でしょ、合コンきませんか？　ドタキャンしたバカのせいで、人数合わなくなって困ってるんですよ」
天野勇は帰り支度を中断し、講義後の予定がないと決めつけた男に振り向く。
女性受けしそうなキザな声の主は西園寺剛だった。
呼びかけた勇の顔を見るなり、芝居がかった仕草で前髪をかきあげる。
窓から射し込む春の陽光が、西園寺の高級腕時計――オメガ――に当たり、ギラついた光線となって勇の両目を襲う。
「可愛い女来ますよ。センパイ、まだ童貞なんでしょ？　センパイがどうしてもって頼むなら、俺が間に入ってもいいんですけど」
眩しさに両目をすがめる勇をニヤニヤ眺めながら、西園寺は締め括った。オメガの光は相変わらず勇の両目めがけて飛んでいる。
西園寺はK地方有数のゼネコンの次男だった。
爽やかアイドル系のハンサムで、馬鹿げた値段のアクセサリーを優雅に身に着けている。抜きんでているのは見た目だけでなく、勉強も運動も人並み以上の成績を叩き出していた。
冗談のようなスペックからくる自信は二枚目の顔や立ち振る舞いに滲み出ている。
とても一歳年下とは思えない貫禄だった。
「ゴー、天野センパイに女抱く度胸なんてあるはずないじゃん。センパイはイノセントなんだから、困らせちゃ可愛そうだって」
竹の中身のような声で西園寺の腕に抱きついたのは、浅黒い肌の女だった。
くすみのない黄金色の髪を七三分けにし、欧米女優並みのスタイルを持つ美女である。
露出度の高い服を着て、アクセサリーを華麗に着け、背筋を伸ばして胸を突きだしている様子は、女として自信たっぷりであることを示していた。
フルネームを聞いた覚えはないが確か、シンディという名前のはずだ。
西園寺の講義が終わると、どこからともなくひょっこり現れ、ベタベタといやらしく絡んでいる。
名前からすると、欧米人の血が混じっているのかも知れない。抜群のスタイルはそのせ

いか。ただ、喋り方は完璧に日本人のネイティブだった。
シンディは金持ちの息子にしなだれかかりながら、彼と同等以上の見下した目で勇を見ている。
「そ、そうだね……悪いけど場違いそうだからボクは遠慮するよ……せっかく誘ってくれたのに……すみません……」
勇は剛やシンディと同じ大学一年生だった。ただし、歳は十九歳。他のふたりよりも一歳年上である。
センパイという敬称は、一浪した同学年ということからくる蔑称だった。
講義で西園寺とペアを組まされた際、授業そっちのけで根ほり葉ほり聞かれた末に、一浪したことを言わされ、女性経験がないことさえも暴露させられたのだ。
以来、シンディなどの西園寺絡みの人間は慇懃無礼に揶揄してくる。
講義室にはまだ大勢の学生がいる。何人かは好奇の目でこちらを見ていた。
そんな中で童貞と呼ばれる屈辱。
年下に揶揄される腹立たしさ。
（くっ……悔しい……！　でも仕方ないよなぁ……）
ドス黒い感情が沸き立ってくるが、蛇に睨まれた蛙の心情の方が勝っていた。
自分が容姿も能力も平凡以下だということはわかっている。大学入学も、寸暇を惜しんで努力して、やっと成し遂げた。
性格が悪いのに財力、能力、容姿に恵まれている男と、同じように自信たっぷりの女に囲まれると、努力に努力を重ねた過去も進学した成果も、誇りどころか自分を惨めにする履歴でしかない。
「んじゃ、他を当たります。多分、センパイが自家発電してる頃には、俺は可愛い子ちゃんとハメまくってると思いますんで」
笑って吐き捨てると、西園寺はシンディに抱きつかれながら教室から出ていった。
「胃がムカムカする……他人をダシにして優越感に浸る……何であんな最低な奴がこの世にいるんだろ」
勇はどんよりした目で、肺に溜めていた空気を吐き出した。彼らがいると呼吸も上手くできなくなる。
品性下劣な男に付き纏われる鬱陶しさと、嫌なのに何もできない自分の矮小さに鬱屈としながら、勇は教室を後にする。
向かった先は自宅アパートではなく、大学

## 第一話　褒美をとらさねばなるまい

の外れにある森だった。
　広さはスーパーほどだろう。鬱蒼と樹木が生い茂り、陽光があまり届かないために薄暗い場所だった。時折吹き抜ける風は緑の匂いたっぷりの涼風で、肌に心地いい。外から見ると薄気味悪いが、晴れ過ぎた春の昼間でも過ごし易い場所である。
「やっぱり、ボク以外はこないか」
　草ぼうぼうの道は踏まれた形跡がなく、自分が帰った後には誰も訪れていないことが伺えた。
　森に入って二分も歩くと最奥へたどり着く。年季の入った小さな鳥居、風化してぼろぼろの祠、雨水も溜まっていない涸れた手水舎。
　一ヶ月前、何ともなしに大学内を散策している時に入り込んだ時は、長い丈の草に埋もれていて、まるで墓所のようであった。
　勇は躊躇いなく草をむしり、鳥居や祠の苔を取り去り、へどろが溜まった手水舎を掃除した。
　信心深さ故の行動ではない。祠のいわれなど勇はまったく知らないし、興味もない。
　ただ、誰に省みられることもないみすぼらしい祠が、哀れに思えた。
　大学に入学し、知り合いのいない土地で一人暮らしを始めた寂しい自分と重ね合わせたという面もあるだろう。寂れた場所を愛でることは自分の慰めにもなるようで、手入れをしている時は一人である寂寥感や、鬱屈とした悪感情を忘れられる。
　ガサゴソ、ガサゴソ。
　勇は鞄から注連縄と柄杓を取りだす。どちらも安物だが、祠と手水舎に備えると見栄えが上がった。
　登校時にコンビニで買った白玉団子を供え、昨日供えた一口最中の包み袋を鞄にしまう。
　カラスでもつついたのだろうか。最中の袋は破けて中身が空になっていた。祠の下にも空袋が散乱していたが、それらもすべて拾い集めた。
「これでよし」
　心に満足感が湧いてくる。周囲の空気も心なしか清浄に感じられる。不愉快な年下たちのことなどもう遙か昔のことに思えた。
　ここに訪れて掃除をし、供え物をあげることは勇の日課になっていた。
　大学に無断でしているので、いつかは注意される時が来るだろうが、その時までは続けようと思っている。
　ただ、カラスが集まり学内の環境に悪影響

が及ぶと問題なので、このままつつかれるのであれば、供え物は自発的にやめるべきだろうが。

そんなことを考えながら、ペットボトルに詰めた水で手を洗い、慣れない挙措で二拍二礼を行った時。

「今日でもう三十二日目。今時、よくも飽きずに参るものじゃ。何十年ぶりかのぉ……これは、褒美をとらさねばなるまい」

凛としていながらどこか気怠げな艶声が静かに響いた。勇が聞いたことのない美声だった。

「え？」

対面する祠がぼうっと輝いたかと思うや否や、屋根からクラゲのように頭が浮いてきた。ゆっくりと釣り上げられるように顔が現れ、身体が後を追って飛び出してくる。

「……え！」

祠から出てきたのは豊麗な女性だった。

歳は二十代後半だろう。墨のように艶やかな黒髪を三つ編みにしている。切れ長の目の瞳も綺麗な夜空色だった。眉は力強さ一杯で太い。それらと鼻、口が絶妙に配置されている細面だった。慈愛的な人妻にも、凛とした姉系アイドルにも見える奇妙な美人である。

格闘ゲームか漫画かアニメのキャラかと思うほど、やたら露出度の高いくノ一衣装で身を包んでいるのだが、色気と勇猛さ、セクシーとストイックを両立させた出で立ちだった。

露出する撫で肩や太股はシミ一つない滑らか肌で、裸身の美麗さをありありと想像させられる。

胸とお尻は、横倒しした釣り鐘とドッヂボールでも入れているかのような膨らみようだった。帯で締められた腰が細いので、余計に大きく見えた。

そして、額に真っ白い鉢巻き、細腕に鉄甲、しなやかな足に脛当と長靴下をつけている。

「わしは天女。ここに祭られている道祖神じゃ。して、お主の名は何と言う？　……なんじゃ、阿呆みたいに口を開けて。名乗ったわしが名を尋ねているのだ。答えるのが筋であろう」

祠から美女が飛び出し、古風な言葉で話しかけてくるという異常事態に、勇はすっかり放心していた。

「あ……えと……勇といいます……あまめ、さん？　天野……勇……」

まだ衝撃が残った掠れ声で辛うじて言う。

天女と名乗った女神は、優雅な挙措で供え

物の団子を摘み、口をつけた。
「もぐもぐ、ごくん……ふぅ……ふむ、あまのいさむ、か……うむ、なかなかいい名じゃ……あむっ、うむ、昨日の最中もよかったが、今日の団子も美味だのぉ」
幽霊のように祠の中から出てきたというのに、物質的な人間と同じくお菓子を美味しそうに頬張っている。
「わしは甲羅を経ているから自由に受肉できての。だから、実体のない霊体でありながら、肉の喜びも知っているのじゃよ」
勇の胸中を見透かしたようなタイミングで、天女は説明した。
団子を食べ終え、子供のように指と舌を舐めると、未だに呆然とする勇に向き直る。
「ふむふむ、こうして間近で見るとよくわかる。お主、間違いなく童貞じゃな。しかも、一生女を避ける系統じゃ」
「……！　な、なんてこと言うんですか！」
密かに気にしていたことであり、初対面の女性だか女神だかに言われるべき台詞では決してない。
勇は目の前の不可思議さを忘れ、不機嫌を滲ませながら口を真一文字に引き結ぶ。

天女は勇の不機嫌を完全に無視して白い歯をこぼす。
「よし、決めたぞ。わしに尽くしてくれた褒美として、お主を男……いや、一人前の牡にしてやる」
大輪の花が咲いたような、溌剌とした笑みだった。
（え……うわぁ……なんて綺麗な笑顔なんだ……）
勇は思わず魅入っていた。失礼なことを言われた不快さは綺麗になくなっている。
「では勇。わしの住処にいこうか」
そう言った天女が呪文のような言葉を紡ぐと、勇の視界がぐにゃりと歪む。歪みは渦となり、やがて視界は白い光で一杯になった。
「おわぁ、なんだコレぇ！」
夢でも体験したことのない現実に、勇は大声を上げさせられていた。
直後、エレベーターで感じる軽い落下感に襲われ、気づくと畳の和室に佇んでいた。
「え……あれ……なんだここ……」
神社にあるような広い和室。達筆に『おもてなし』と書かれた掛け軸。銀シャリの艶を帯びる畳が、心身をリラックスさせる上質な草の匂いを放っている。

開け放たれた襖の向こうには枯山水が広がっている。よく刈られた松が並び、無骨な大石が景色に風情を加えていた。遠くから、鹿威しのカッポンが聞こえてくる。

「むふふふ、驚いたか。驚いたよなぁ。ここはお主が手入れをしてくれた祠の中じゃ。厳密に言えば祠と隣り合わせの別世界だが、それをいうのは野暮じゃろう」

宝物を見せびらかす子供のように胸を張り、天女は告げてくる。

「祠の中……別世界……それに女神……嘘でしょ……ボク、白昼夢でも見てるの？」

「嘘ではない。ほれ、これが夢の世界で味わえる感触か？」

ボニュっ。

天女は勇の手を取り、その手のひらを自分の胸元に押しつけさせた。

横倒しした釣り鐘みたいに前に突き出た胸元だった。鎖骨とバストの頂点は、急斜面ではなく断崖絶壁を描いている。

薄い布越しに、春のような温もりが伝わってくる。天女の乳房の体温だ。表面は柔らかいが、奥の方はゴム鞠並みに弾力が強い。

「うわぁあああああ！」

勇は乱暴に手を引っ込めた。異性に触れるなど、小、中学生時代のフォークダンス以来だろう。その時にしろ、手と手、いや指と指を合わせただけ。胸に触れたことなど人生初である。

「す、すみません、すみません！」

胸は女性にとって大事な部分。勝手に触れていい場所ではない。

罪悪感に駆られ、勇は何度も頭を下げる。

「フフ、うぶじゃのぉ……これ、頭を下げるのをやめい。お主が謝ることはなかろうが。なにせ、わしがお主の手をとって触れさせたのだからな」

ばふっ、むにゅうぅぅ。

「――――ッッッ！」

また手を取られたと思った瞬間、豊満な胸元に顔を埋めさせられた。

女の腕力で後頭部を押され、綿の薄布越しに、胸の谷間の奥にある胸板と鼻先がくっついた。

顔面全体に、胸のぬくもりと圧迫感が押し寄せてくる。

天女の方が頭一つ分背が高いので、傍から見れば、まるで母親に抱かれる子供であった。

「ほれほれ、女の胸に顔を埋めるのはどうじゃ？　わしの胸、そんなに悪くなかろう？」

# 第一話　褒美をとらさねばなるまい

美声を悪戯っ子のそれに変えながら、胸で抱きしめた勇の顔を左右にスライドさせる。
（うあああ……すごい……悪くないどころか……気持ちいい……）
手で触れている時も感じたが、密着度合いが強い今は尚更わかった。
天女の乳房は、やはり弾力が強い。表面は餅のように柔らかいのだが、内側にいくにつれてゴム鞠みたいに押し返してくる。
餅とゴム球のデュエットは、日向ぼっこしているような心地よさと、股間がざわめく快感を与えてくれていた。
さらに、天女の身体からは桜のような香りが放出されている。
あっさりしていて少しも押しつけがましくなく、それでいて一度嗅いだだけで忘れられなくなる、仄かで強く、そして甘い芳香。
（ああ……こんなの初めてだ……これが女の人……）
初めて体験する過激なスキンシップは酷く魅力的で、勇はいつの間にか借りてきた猫になっていた。
密着する乳房の感触を感じながら、鼻で呼吸をし、一緒に魅惑的な肌の匂いを嗅ぐ。
「興奮してきたようじゃな勇よ。お主の鼻息がわしの襟ぐりにふーふーかかってこそばゆいぞ」
「あ、ああ、ごめんなさい、すみません、鼻息を吹きかけてしまって……！」
「よいよい。男を夢中にさせているのは、女として誇らしい……どれ、もっと夢中にさせてやるか」
天女は勇の後頭部から手を離すと、その場で跪いた。
訝しげに思った勇は、紅潮した顔で彼女を見下ろす。
天女のえりぐりが大きく空いているので、前に突き出る肉釣り鐘の谷間がくっきりと見えた。自分の鼻息のせいだろう。上乳は全面的にしっとりし、外から射し込む光を乱反射している。
スス、ズリリリッ。
「うわぁ！　な、なにをするんですか」
「見てわからぬか？　お主の下穿きを脱がしているのじゃよ」
膝をついたままでベルトを外し、スラックスと腰骨の間に手指を差し込むと、ブリーフごと踝まで下げる天女。
乳房に顔を埋めていた興奮で勃起していた肉棒が、抑えをなくして躍り出た。

「うぅ……ぁぁあ……！」
股間と大気が触れあって、やたら涼しかった。
誰にも見せたことのない性器を、胸に顔を埋めさせてくれた美人が凝視する。
恥ずかしさのあまり動けない勇に構わず、鼻息がかかる距離で見詰めていた。
「ふむふむ……よいぞ、なかなか牡らしいではないか。外見はなよっとしているが、やはりお主も牡よのう。見ていると胸がときめいてくるわ」
斜めに反り返る肉棒は皮を被っているが、十三センチをほんの少し越えている。
肉竿の色はやや黒ずんだ肌色。太さは大人の指二、三本位だろう。そこかしこに浮き出る血管が、牡の性器らしい迫力を醸す。
ペニスと同じく無毛の陰嚢は、年相応に重たげだった。
（うそだ……この人、嘘をついてる……）
学生時代の修学旅行の折、大風呂で一緒になった男子のペニスは勇は見た。
彼らは勇と違って腰にタオルを巻いていず、彼よりも太くて長いペニスを堂々とぶら下げていた。勃起すれば体積が増すことを考慮すれば、自分の勃起ペニスなど比べものにならない。
勇を扱う所作は手慣れているし、男性器を目の当たりにしても動じないところを見るに、天女は経験豊富でセックスも好きな性格に見える。
ならば、どう間違っても自分の十人並みのペニスに心躍らせるはずはない。皮被りの幼げなものなら尚更だ。
「では、しゃぶらせてもらうぞ勇よ」
見上げる天女と目が合う。
母性を感じさせる優しい目には、嘲りの感情が微塵も見当たらなかった。包容感たっぷりで、魂の芯から包み込まれている気にさせられる。
天女が首を伸ばした。
「はむっ……んむぅぅぅ……」
たらこのように厚く、バラみたいに赤い唇が上から降りてきて、亀頭にかかる皮を捉えた。そのままゆっくり顔が下がってくる。それに伴い咥えられた皮がずり下ろされていく。
咥え込んだ時にも、唇だけで皮を剥く動作にも、嫌々している様子はまったくない。
美しい女性の口の中で、亀頭が剥き出しになっていく。敏感な表面に、日溜まりのような口内の温かさと、粘膜の存在感が伸し掛か

ってくる。
「ぺろぺろ……んふっ、ふぅん……れろれろれろ」
亀頭の皮をカリの裏に押しやると、天女は体勢を直した。亀頭を咥え込んだまま浮かせた腰を沈め、ペニスを畳と水平にさせる。
天女は上目遣いで勇に微笑みかけると、亀頭に吸い付きながら頭を振り始めた。
高熱を放つ牡肉塊に唇の弾力と唾液を擦り付け、喉奥から熱い吐息を吹き付ける。
昂ぶってビクつきだした亀頭の先端を、ソフトクリームの頂上にするみたいに、舌先で往復舐めをする。
「おぁっっっ……ぼ、ボクのペニス……しゃぶられてる！　フェラチオされてる！」
女性に触れたことさえほとんどない勇も、健康な肉体を持つ男。成年向けの雑誌やＤＶＤは幾つも持っていた。童貞だが、セックスの知識はそれなりにあるし、憧れてもいる。
だが、心に根付く劣等感故、自分が体験することはないだろうと思っていた。
こんな価値のない男を相手にする女性などいるものか、と。
「じゅるるる……んく……んふぅぅ……れろれろれろぉぉ、ぢゅ〜〜〜っ、んく……」
「ああ！　ねぶられてる！　ボクのペニスに浸かった唾なのに……くぅ〜〜〜ッ、飲んでくれてる！」
その性行為を体験できている。
しかも、相手はとびきりの美人であり、牡として程度の低い自分を相手にしているのにちっともバカにしていない。
それどころか、下品になるのも構わず、小鼻を広げて暴風の鼻息を撒き散らし、ペニスのエキスが混じった唾液を当たり前に飲み下し、さらには、嬉しそうな上目遣いを送りながら心を込めてフェラチオ奉仕をしてくれている。
嬉しくて仕方がなかった。心も身体も、快感で満たされている。
亀頭を重点的に責めたフェラチオの快感は凄まじく、ペニスは青天井に硬く熱くなっていく。
ビクッ！　……ビクククッ！　……ビクンッ！
吸われ、ねぶられる亀頭は肉厚の唇に抱かれ、快感の丈を痙攣で伝えていた。フライパンのポップコーンよろしく跳ねる際には、重く伸し掛かる唇をはねのけそうな勢いだった。
「ぢゅぽっ……んふぅ……ふあぁ、んフ

フ、元気がよくて大変よろしい。勇よ、わしの口淫は気持ちよいか？」
頭を引いてペニスを吐き出した天女が尋ねる。
口から解放されるや否や、唾液を塗り込められたペニスが斜めに反り返ると、天女はおおっ、と小さく歓声をあげた。
「は、はい……すっごくいいです……」
肉棒の先端は彼女の唾液ですっかりコーティングされており、赤い身をぬらぬらと照り光らせている。
「うむ、素直な奴じゃ……わしは今からお主を射精させる。遠慮なく好きなところに、好きな時に、好きなだけ放っていいからな」
口の端から唾液の筋を垂らす天女はそう言うと、細い首を伸ばし、上から亀頭にかぶりつく。畳と水平の位置に戻ると、長い三つ編みを弾ませながら頭を振り始める。
「んフッ、んンンッ、ぢゅるる！　んくんく、レロレロッ、んぐんぐ、んむ〜〜〜っ」
前髪も揺れ、髪にせき止められていた香しい体臭がふわりとくゆる。
下品な鼻呼吸を繰り返す美顔は徐々に紅潮していた。細かい汗を放出し、きめ細かい雪肌に色っぽい艶を加算する。
頭を振る勢いでほつれた髪の何本かが額や頬、こめかみに貼り付き、牝の色香を際立たせた。
もう上目遣いはしてこないが、代わりにフェラチオ奉仕に没頭している風だった。
頬を凹ませて亀頭を吸いながら、締める唇で亀頭の表面を前後に擦りあげる。舌が巧みに動き、鈴口部分を上下に舐め回す。
「う、ぅああっ……あ、天女さまっ……天女さまぁッ！」
腰の裏が炙られているように熱くなっている。
ペニスの根本からは、グラグラ煮え立つ衝動がこみ上げていた。考えるまでもない。射精衝動である。
ただ、手淫で絶頂する際に感じる感覚とは段違いの快楽だった。
信じられない美人に、一生無縁と思っていたフェラチオをされている精神的な喜び。
しかも、天女は技巧者らしく、手淫を遙かに上回る悦楽を享受させてくれていた。
「で、でます、もう出ちゃう……このままだとお口に出てしまいますから！」
ここまでしてくれる女性の口内に、汚らしい汁をぶちまけることはできない。

危機感に蹴り飛ばされた勇は、天女を引き剥がそうと手を伸ばした。
ワシィィィッッッ！
ところが、当の天女は勇の尻タブを握り締めた。
絶対に離さないとの意志を滲ませながら、これまで以上に頭を振り、舌を揺らし、吸引する。
膨れ上がる口淫快感が全身を痺れさせる。射精間近特有のペニスの甘ったるい疼きも手伝って、天女を引き剥がす余力などすぐに蒸発していた。
目が合う。
――遠慮は無用。たくさん出すがよい。お主の精液を、このわしに飲ませてくれ……わしの口に思う存分精を吐き出すのじゃ。楽しみにしているぞ――
淫らな奉仕と反対に、慈愛の塊みたいになっている黒い瞳はそう言っている風に見え、聞こえたわけでもない声が、頭の中に確かに響き渡った。
「あ、天女さまァァァァア！」
ペニスだけでなく射精まで受け止めてくれるという心に触れ、勇は思いきり甘えた。
快楽で痺れる手のひらになけなしの力を込めると、黒髪の頭を抱え込んだ。自慰の時にティッシュへ放つ心地で女の口内に吐精する。
ドビュ～～～～～！　ドグドグッ……ビュビュッ！
カリ首まで亀頭を含んでいた天女が、静止する。
「ンふゥッ！　んぐっ、れろれろ、んぐぐ……ングンッ……ブチュ～～～、ゴクッ」
上目遣いで勇の顔をチラチラ見る天女は、満足そうな視線を浴びせる。口内に吐き出された牡汁を処理する様子は、子供の成長に喜ぶ母親のように満ち足りた風だった。
天女は頬を蠢かせながら舌を使い、精液を喉奥に追いやり、飲み下す。
断続的に射精を行う亀頭を舐め回し、尿道に残り汁を残さぬように愛撫する。唇で亀頭をくるんだまま、肺活量を駆使してバキュームする事も織り交ぜる。
奇抜なくノ一衣装の女性は、処理が終わるまで嫌な顔一つしなかった。
「ふぅ……牡汁もなかなかだったな。蜘蛛の糸みたいに粘っこくて、お湯のように熱い。喉に絡みついて、飲み下すのに苦労させられたわい」
ペニスを口から解放し、跪いたままで勇と

目を合わせ、にっこり微笑む。
「ああ……はあぁ……ぁあ……す、すみません……口に出しちゃって……」
まだ口に含まれているかのような甘い痺れをペニスに感じながら、勇は謝罪の言葉を口にする。
罪悪感よりも牡の満足感の方が遙かに強かったので、謝辞は浮ついていたのだが、初対面の女性に精液を飲ませるという、いけないことをした意識はある。
「よいよい。わしは好きでお主の汁を口にぶちまけさせ、ごくごく嚥下したのじゃ。謝られる筋合いなどない……くふふ、まだまだ元気じゃのぉ」
天女の視線は斜めにそそり立つ肉棒に注がれている。
唾液でぬめ光る亀頭は、尿道の奥深くに残っていた精液を吐き出して、白い粘糸を垂らしていた。
ビクビクと間断的に脈動する様はまるで、食い足りないと吠える獣のよう。
実のところ、勇ももっと射精したいと思っていた。飽きるまで、陰嚢の精子が空になるまで天女に搾り飲まれたいという欲望が心の底から湧いてくる。

（そんなのはダメだ……これ以上甘えるなんて迷惑に決まってる……一回してもらっただけで十分じゃないか……きっと、一生のオカズになるから、それでよしとしなくちゃ）
「次は、わしの女壺と戯れようなぁ」
しっとりと微笑んだ天女は立ち上がり、衣擦れの音を奏でながら衣服を脱ぐ。
脱いだのは胴を覆う布だけだった。頭の鉢巻き、籠手、長靴下、脛当などはそのままである。
「ああっ……！」
口淫中、顎の下でゆさゆさ揺れていた肉の丘の連なりは、纏う物がなくなっても横倒しの釣り鐘型を保っている。
乳肌は雪のように白いのだが、口淫で興奮していた名残が消えず、汗を吸ってツヤツヤしている。
肉房の頂は、土台も肉柱も薄いピンク色だった。桜の花を連想させる色合いでありながら、熟れた柿の成熟感を漂わせている。
特に目を引く乳首は、丘の上に立てられた鉄塔じみていた。芯が入っているようにピンとそそり立っている。そのサイズは、男の小指の第一関節までの長さと太さと張り合えるほど。

肋骨の無骨さを覆い尽くしながら、少しも突き出ていないなだらかな柔腹肉と、括れながらも腰骨を浮かせない豊満な腰が、豊乳の量感を際立たせる。

生唾ものだった。

ＡＶや雑誌で、これほど美麗でこんなに牡欲を煽られる女体を見たことはない。

勇の心臓の鼓動が早くなり、萎えない逸物にさらに力が漲っていく。

天女が胸板を押してきた。ごくごく弱い力で、簡単に振り払える力であった。

しかし、勇の浅ましい心が、天女に胸板を押されることへの抵抗力を削ぐ。フェラチオだけで満足するべきだと強く思っていた勇は、あっさり仰向けに倒された。

「さぁ、存分に楽しもうぞ」

低く粘りけのある艶声で呼びかける天女。ニーストッキングめいた物を穿くムッチリした太股が、大の字になった勇の腰を跨ぐ。

無毛の大陰唇は唇に負けない位にぽってりしていて、奥からバラ色の肉ビラがちょこんと顔を出している。

目を皿にしても、どこにも黒ずみを見つけられない。まるで生まれたばかりのように清楚な陰部だった。

しかし、成熟と清廉を同居させる性器は、獲物を前にした獣のように女蜜を垂らしている。

表面張力の限界を超えた滴が、ほぼ垂直に立つペニスの亀頭に降った。温くて粘りけのある水気が、肉の頂上から中腹に向けて降りていく。愛蜜が薄く広がり落ちていくくすぐったさだけでも射精してしまいそうだった。

「うぅああ……で、でも……」

天女は前のめりになって語りかけてきたので、肉釣り鐘がぶどうのように垂れた。重力に引かれて伸びることはなく、寺の釣り鐘が逆さ吊りされている具合である。

手のひらが置かれた胸板にかかる慎ましい体重とは裏腹に、今にも落ちそうな程に量感たっぷりの乳房は見ているだけで興奮させられた。

首を伸ばしてむしゃぶりつきたくなる衝動に駆られる。

無論、魅惑的な女性器と一つになりたいという欲望も膨れ上がっていた。

「ボクなんかが……天女さまと……天女さまのような美人とセックスするなんて……」

劣等感が頭をもたげている。

女性と……しかもこんな気だても器量も申

し分ない女性とセックスする資格が自分にあるのか？　自分には、情事の相手に選ばれる価値などあるのか？

欲望と引け目とがせめぎ合う。時間をかけて熟成していただけに、後者が上回ろうとしている。

「いいのじゃよ、勇よ。わしはそれを望んでおるのだし、お主とてわしとまぐわいたいという欲望を持ってくれておるのじゃろう？」

天女は豊満な乳房を垂らしながら、勇の頭の横に片手をつく。

もう片方はペニスの根本を摘んだ。滾る熱望を直立させ、蜜を垂らす陰裂と触れあわせる。

くちゅり……。

「ああっ……あ、熱い……！」

「どうじゃ？　お主と一つになりたいという言葉、嘘ではなかろう？　嘘をついている女が、これほどふしだらに涎を垂らすことなどできまい……ほれ、体温だけでなくわしの女壺の感触も味わうといい」

ぐちゅぅぅぅ……。

爪先立ちの四つん這いだった天女が両膝をつき、腰を下ろしてくる。

亀頭が少しずつ、淫唇に埋没していく。障子の隙間ほどに綻んでいた割れ目だったが、奥はぴったり閉じていて、触れただけでこじ開けられるものではなかった。

天女が豊かな尻を下ろすに従い、女の身体を割り開く実感がペニスを駆けていく。

ひたすら甘かった。

割り開いた女壺は、硬い勃起ペニスを打ち込まれているのに再度閉じようとする。その圧迫感がペニスを心地よく痺れさせる。

膣の周りに配置された肉たちが、全周囲から亀頭に伸し掛かってくる圧迫快感は、男の手のひらで包まれるのとは雲泥の差だった。この世にこれほどの快感があるとは、にわかに信じられない。

「ん……ンふっ……はぁぁ……満たされていく……わしの性器が勇の牡棒で……みっちりと……はふぅ……」

勇を見下ろす美貌が、しどけなく弛んでいた。太い眉が柳のように垂れ、黒く澄んだ瞳は色っぽく潤んでいる。汗ばんだ顔は紅潮していた。端正な細面は、全身から嬉しさを滲ませている。

（ああ……本当に受け入れてくれてるんだ……ボクなんかを……この人は……！）

心の底から嬉しかった。

今まで体験したことのない快楽を与えてくれている美女が、自分などを心から抱擁してくれている。その実感が、勇の魂で膿んでいた劣等感を洗い流し、清めていく。

「くふぅ……はぁ～……奥まで入ったぞ……わしの子宮口、感じるな？」

肩幅に開いた勇の太股にお尻をつきながら、くつろいだ声音で言ってくる。

両者の胴底は密着しあい、膣から押し出された愛蜜が染み出し、双方を濡らしていた。愛液の甘酸っぱい匂いが、い草の匂いに覆い被さり、もう勇には天女の汁と身体の匂いしか嗅ぎ取れない。

「か、感じます……ボクのペニスの先にコリコリした感触がくっついていて……ああっ……子宮口だけでなく、ペニス全部が膣に包まれてる……！」

「んっ……わしも感じるぞ。お主の熱く猛る肉棒の存在感……はふぅ……内側からわしの膣を押し返してきて……んふっ、ビクビクと暴れておるわ」

ぬろ～～～～～っ……じゅぶぅぅぅぅぅ……ぬる～～～～～～～。

天女は少し背中を起こすと、上下に腰を振り始める。

ゆっくりした動作は、まるでペニスを咀嚼しているようだった。肉壺に迎え入れた肉棒の熱と硬度と重量感を、じっくりと味わっている。

「う、うああ……も、持って行かれる……ふああ……！」

膣が、肉棒に噛みついてくる。触れ心地は柔らかいのに重たく、締まり具合は男の握力で潰されているかのよう。自分で手淫する時の快感とは次元が違っていた。

天女が上へ下へと腰を使う度に、噛みついてくる肉襞も上へ下へとめくられていた。特にカリ首の下まで陰部が引き上げられた時には、大陰唇と小陰唇がスッポンのように食いついている様子が目にできる。

「はぁ……はああ……いい魔羅じゃ……んふぅ、堪らなくなるのぉ……ぅんふっ」

ほつれ髪をこめかみに貼り付かせる天女が、徐々に腰振りのピッチを上げていく。

ピストン速度に比例して肉棒も猛る。女蜜でコーティングされた肉棒ははち切れんばかりに膨らみ、力強く脈動している。

「ああっ……ち、チンポ熱いッ！　溶ける！　溶けちゃうッ！」

感極まった勇は、とうとう淫語を吐き出し

# 第一話　褒美をとらさねばなるまい

柔らかく重く絡みついてくる肉壺。
愛液が存分に吐き出されているので、摩擦は至極スムーズ。今まで感じたことのない快楽しか感じない。
一擦り毎に熱くなる肉壺。子宮口を叩くと味わえる、コリコリという独特の感触。それらは天女との一体感と、牡として牝を征服している優越感を感じさせ、心までもが揺さぶられる。
腰は燃えているように熱くなり、肉棒は蜂蜜めいた快感の権化となっていた。精液がせりあがってきて、ペニスの内部で溜まっているかのような感覚もある。
もう、何分も持ちそうにない。目眩くフェラチオで一度射精した後だというのに。
それほど、女壺でピストンさせてもらえる快感は素晴らしかった。
「んっ……あふぅ……わ、わしの肉壺も蕩けそうじゃ……ああ、いい……いいぞ勇……わしも、ああ、堪らん……っ」
腰振りによる慣性で、肉釣り鐘が前後にぶらんぶらん揺れている。首を伸ばせば口にできる位置で、腫れ上がった桜色乳首が縦線の軌跡を描いていた。
全身を紅潮させた天女から、香しい体臭と汗と愛液の混合臭がくゆっている。
「天女さまっ、ああ、ま、また出ますっ、精液出ちゃいそうですッッッ！」
「いいぞ勇、んふっ、そのままわしの中に、はああ、出すのじゃっ……わしももう少しで……ああ、達する……と、共に果てようぞ……んふああ」
口調に官能的な抑揚をつけながら、天女が口走る。
「は、はいっ……一緒に、ボクも一緒にイキたいですッ！」
「い、勇よ、達する時はどこでイクのかも言うのじゃ、はあぁ、そうすると、もっと気持ちよくなれる……ふああ」
「はいッ、なら天女さまも言ってください、『オマンコイク』と言って一緒に！」
「お、オマンコイク、だな、はあぁ、それが今の言い方なのか、ンッ、承知した……ああ……はああ、お、オマンコイクッ、勇の魔羅とまぐわって、オマンコイクぞぉぉぉ」
ふたりは取り決めを済ませると、快楽行為に没頭した。
天女は乳を跳ねさせながら腰を振りたくり、勇は揺れる乳房を熱視しながら女壺を叩きつけられる快楽を貪る。

「ああ、チンポイクっ、天女さまのオマンコでセックスして、ボクのチンポイク！」
「んくっ、んあぁぁ～、勇の魔羅でオマンコイクっ、オマンコイクぅぅぅ！」
獣のように叫びあい、ふたりは絶頂目指して駆け上がる。
限界まで膨れ上がった亀頭が、突かれてほぐれた子宮口にぬっちょりと嵌まり込んだ刹那、牡棒がピーン！　と突っ張った。
ビュククゥゥゥゥ！　ビュルッッッ！　ドビュビュビュビュ～～～～～～！
「んふぁぁぁあ、汁がぁ、勇の汁が出てるぅッ、中で出されてオマンコイクゥ～～～！」
「ボクもイってますッ！　あああああ、天女さまのオマンコでチンポイってるッ！」
天女の背筋がグンッと仰け反る。仰向けの勇の眼前で揺れていた豊胸が、蹴飛ばされた風に大きく弾んだ。肌に浮いていた汗が飛び散った。汗の甘酢の匂いと、体臭の桜の匂いをたっぷり宿しながら、勇の顔や身体に降り注ぐ。
勇も肩胛骨と尻でブリッジしていた。快感痙攣を起こす膣に締められながら、負けない位に肉棒を脈動させ、精液を吐き出す。
煮沸したように熱くなっている膣は、放出される濁液に埋もれていく。
精液の出口穴と密着している子宮口はあっという間に冠水した。逆流する白濁は、ギッチリ触れあう肉棒と膣ヒダの間の微細な谷間に入り込んでいく。
ゼロ距離から子宮口にドクドク出される感触。若牡の精液の匂い。触られ心地。勇とセックスした記憶が、筆おろし相手の肉壺に刻まれていく。
「くはぁぁあ……ああ……よいのぉ……この感覚……」
天女は陶酔色に頬を染め、青息吐息で精液を吐き出す勇を見下ろす。
「気持ちいいです……はああ……」
勇は感謝の丈を込めて彼女を見詰める。
劣等感を抱いていた自分を包み込み、夢物語と諦めていたセックスをさせてくれ、女と交わる喜びを教えてくれた。きっと、この女性でなければ、ここまで心地いい初体験を迎えられなかっただろう。いくら感謝してもしきれない。
「ふっ……どうやらお主も満足してくれたようじゃな。わしも、久方ぶりに女冥利を味わえて嬉しく思っておる。ありがとう」
天女はほうっと息をついた。花が咲いたよ

褒美としてお主を男にしてやるぞ

うな笑顔を浮かべ、
「これからよろしくな、勇よ」
勇の胸に倒れ込み、その頬に温かな唇を押しつけた。

# 第二話
## 「お主の恩返しは、女の喜びを教えることじゃ」

「んっ……」
勇はカーテンの隙間から射し込む朝日で目覚めた。
実家から遠く離れた大学に入学した勇は、アパートで一人暮らしをしている。築四十年の木造アパートには他に住人はいるものの、今は全員出払っていた。
古い畳の部屋の真ん中に敷かれた布団で眠っていたのは、部屋の主だけではなかった。
「いさむぅ……もっとわしにそそいでくれるかや……むにゃむにゃ」
勇を抱き枕にしている天女が色っぽい寝言を言った。
祠に祭られている女神は、自由に出歩くことができるらしい。
初めて出会ってから一ヶ月が過ぎている。その間、彼女はアパートに入り浸っていた。一人で散歩に出ることもあるが、二十四時間いなくなったことはない。
「んしょっと……」
勇は天女を起こさないよう注意しながら、布団からそっと抜け出そうとする。
抱きつかれている感触は現実的だった。
霊体にも肉体にもなれる天女だが、肉体状態になると人間と変わらなくなる。小食だが物を食べるし、こうして眠りもする。
触れれば春日めいた温もりが伝わってくるのだが、同時にこちらの体温も伝わるのだそうだ。間近で顔をつき合わせている今は仄甘い鼻息と呼気が勇の顔にかかっていた。
パチリ。
「んむっ……おお、もう朝か。おはよう勇」
気をつけたつもりだったが、起こしてしまった。天女はすぐに目の焦点を合わせると、抱きついていた体勢のままでにっこり微笑んだ。子供が父に向けるような、愛情と安心が混ざった笑みだった。
「おはようございます、天女さま」
勇は敬愛の念を込めて挨拶を返す。
天女のような非現実的な存在と暮らしていることも、とびきりの美人と同棲同然の生活を送っているということも勇にとっては奇妙な現実だった。初めは大分戸惑った。しかし、

## 第二話　お主の恩返しは、女の喜びを教えることじゃ

今ではもうすべて受け入れることにしていた。
　現実がこうなのだから拒絶しても意味はないし、天女がいる生活はとても幸福的だからだ。
「起こしてしまってすみません。まだお休みください」
「ん、いやもう起きる。お主は大学の図書館に出かけるのであろう？　一人で寝ていてもつまらないからな」
　天女は目を細めながら勇の頭を撫でた。大人が子供にするような所作だが、心地よかったので勇は抵抗しなかった。

　朝食を済ませると、勇は大学の敷地にある付属図書館に向かった。天女も霊体となってついてきた。
　大学が休みである土曜日だからなのか、図書館の人の入り様はまばらで、勉強用の大部屋は勇の貸し切りとなった。
「れぽーととやらが今日で終わるとよいのじゃがなぁ。男は気がかりがあると、アレの勃ち具合が鈍りおって敵わんわい」
　天女は小声でぼやくと、勇の隣で古い書物を読み始める。
　勇以外の人間に天女は見えない。傍から見れば開いた本を隣に置いているようにしか思えないはずであった。注意深く見れば勝手にページがめくれることに気づくだろうが、人がいないのだからその心配は杞憂と言える。
「すみません。ここの所がどうしてもしっくりこなくて」
　長机に広げた資料と、書きかけのレポート用紙に目を落としながら勇は申し訳なさそうに返す。
　問題の部分には、もう二日もつまずいている。定期テスト前の提出物はこれだけだというのに、片づけることができないでいた。
　ここ二日は、気付くとこの問題のことを考えていた。天女と蜜時を過ごしている時でさえ、いつの間にか意識がそちらに向いていたということが度々あった。
　それほど難題とは思えないの解けないのは、早く肩の荷を下ろしたいという気持ちが焦りとなって頭を鈍らせているからかも知れない。
　と、突然。
「あ、そうか、こうすればいいんだ」
　何の前触れもなく頭が冴えて解決策が閃いた。試しにメモ用紙に書いて検討してみると、何の問題もない。
　勇は早速レポート用紙に書き込む。難所が

すぎれば、あとはあっという間だった。
「終わったようじゃの。ご苦労だったな勇。冴よ世話になった。ありがとう」
「いえ……お久しぶりです天女さま。このような所にいらっしゃって驚きました」
（さえ？）
いつからいたのか。傍らに立っていたのは、セーラー服を着た女の子だった。大学付属図書館は所定の手続きを行えば誰でも利用できるので、高校生がいても不思議ではない。
四角いフレームの眼鏡をかけた、委員長と言うよりは読書少女と言うタイプだった。草原にぽつんと生えた大木の日陰で本を読む姿が、すこぶる似合いそうな清楚な若娘である。
セミショートの髪は月光のような銀髪で、瞳は純血の日本人ではありえない真っ赤なルビー色をしている。
セーラー服で包まれる身体は、簡単に折れてしまいそうなほどに華奢で儚げだった。
マイクロミニのセーラースカートから伸びる足はスラリとしている。ムッチリした天女とは対照的にほっそりした足で、学生らしい白いハイソックスがよく似合っていた。
美人ぶりに感心し、頭のてっぺんから爪先まで眺める勇。
ふと、目と目があった。
「……あら？」
彼女は不思議そうに小首を傾げ、頬に指を当てて思案する仕草をした。少しの間そうした後、おずおずと言葉を紡ぐ。
「ひょっとして……わたしが見えてらっしゃるのですか？」
妙な反応だったが、超常現象と暮らし始めた勇にはピンとくるものがあった。
そちらを見ると、くノ一装束の超常現象は生徒の正答を褒める教師の顔をする。
「その娘は冴という名じゃ。知り合いの一柱でな。冴の側にいる人間は脳が活性化し、思考力や閃きが格段に増すのじゃよ」
「なるほど。ボクがレポートを片づけられたのは冴さんのお陰なのですね。ありがとうございます冴さん」
勇は椅子から立ち上がると、感謝の気持ちを込めて深々と頭を下げた。
慌てた風に胸の前で手を振る冴。
「あ、いえ……どういたしまして……わたしは大したことはしていませんから……声も聞こえてらっしゃるのですね……あの、天女さまのお知り合いなのですか？」
「うむ。今は専らこやつと過ごしておっての。

気の交換もしているので、お主の姿も声も認識できるというわけじゃ」
「なるほど、そうでしたか」
　天女によると、セックスは単なる快楽行為ではないらしい。肌の触れあい、体液の混ぜあいは同時に魂のエネルギー――気の交換行為でもあるのだとか。
　女神の気を得た勇は、天女以外の霊体女神を認識できるようになっている。触れあうことさえできるとも聞いていた。
　実際、霊体になった天女とアクロバティックな体位を楽しんだこともある。その時の彼女は重力を完全に無視していたが、触れれば温もりを交換できるし、見た目通りの重さも感じられた。性的快感も享受している風だった。そう言う点では霊体状態と肉体状態はあまり変わらないのだ。
（恥ずかしがってる……？）
　説明を受けた冴は頬を赤らめていた。まるで、猥談を聞かされたウブな女の子のように。
「なんじゃ、どうやらまだ未通のようじゃのぉ。ふむ……おい勇。お主、冴に世話になったのだから恩返しをせねばならぬよな？」
「え？　……えぇ、まぁ……それは助けられましたから。できる限りのことは、させてもらいたい」
　だしぬけに言ってきた天女の真意はわからなかったが、取り敢えず勇は頷いた。恩返しをしたいという言葉は嘘ではなかったが。
「うむ。よい心がけじゃ。では冴、勇、人気のない所にいこうぞ」
　天女に促されて後片付けをした後、勇は急かされるままに図書館を出た。
　大学の校舎に入り、隅にある無人の教室に訪れる。勇の大学は日曜日にのみ施錠されるので、日曜以外は出入りできるようになっていた。
　大学と言っても、小中高と変わらない作りの教室は幾つもある。三人で入った教室も同じだった。何かに使われてそのまま放置されているらしく、机も椅子も大分乱れている。
「あの、これから何をされると言うのです？」
　丁寧な言葉で冴が天女に尋ねる。彼女も天女の意図がわからないらしく、戸惑っている風だった。
　天女は妖艶に口角を釣り上げた。
「心配するでない。心を落ち着けて楽にするのじゃ」
　低く妖しい声音でそう言うと、佇む冴に後ろから抱きつく。

褒美としてお主を男にしてやるぞ

## 第二話　お主の恩返しは、女の喜びを教えることじゃ

「えっ？」
　思いもしない展開に、勇が目を見張る。冴もびっくりして目を見開いていた。
「な、なにを、アっ……んふぅ、あ、天女さま……はああ」
　冴は天女よりもずっと背が低い。くノ一装束の肉釣り鐘で、銀髪の後頭部を抱きながら、天女は冴の胸元に手を伸ばす。
「声が震えておるな。怯え声にも聞こえるが……ふふ、聞く者が聞けば癖になる声の媚薬じゃの」
　指抜きグローブの手のひらが大きく開き、セーラー服越しに小振りな乳房を捉えた。
　軽く指を食い込ませてセーラー服に皺を刻み、乳房の輪郭を浮き上がらせる。
「可憐な形じゃ……大きさも丁度よい」
　サイズは男の手のひらに収まる程度だろう。形は水の滴のそれに見える。
　欧米女優にひけをとらない天女の肉釣り鐘とはタイプが違うが、こちらの方が日本人女性らしい乳房と言える。
「あまめ、くふッ、さまぁ……ああ、ひ、人が……人間の方がご覧になっているのにこのようなはしたないことを……んふぅ」
　天女は両乳房を手のひらに収めたままで、親指と人差し指を擦りあわせている。恐らく、乳首を責めているのだろう。他の手指も屈伸を繰り返しているので、乳肉を揉まれながら乳首を刺激されている状態だった。
「声にどんどんツヤが混じってくるわい。可愛いいのぉ。真面目で、情交とは無縁そうな娘じゃが、やはり牝なのじゃな。ほれ、お主の牝顔をもっと勇に見せてやれ」
「そんな……お戯れが過ぎま――あはあっ……！」
　くノ一装束に似合う籠手をつけた片手が、細い身体をなぞりながら降りていき、スカートの下に潜り込んだ。
　手の形に盛り上がったスカートがもそもそ蠢く。
「そ、そこはダメです……っ、敏感ですか……んぁあっ」
　冴は背中を仰け反らせ、細い顎を跳ねさせる。セミショートの銀髪が瞬間的に小さくなびき、百合の花のような匂いがふわりと蒔かれた。
　清楚な眼鏡娘をはしたなくあえがせている元凶は、得意げにニヤついている。摘んだ乳首はやわやわと揉み潰し、スカートの中に進入させた手のひらはいやらしく蠢動させてい

た。
　考えるまでもない。彼女の陰部を愛撫しているのだ。ビニール袋に皺をつけているようなニチニチという小さな水音が股間から聞こえてくる。天女は何度も腰砕けになってしまい、膝を頼りなげに震わせていた。
「あんっ……ああ……み、見られているのに……あっ、そ、そこは駄目で、すッ」
　ほどなくして、天女よりも白い冴の顔に朱色が混じり始めた。ちらちらと勇の目を気にしながら恥じらう赤目には、うっすらと涙が浮いている。
「おい勇。なにをぼけっと見ておるか。お主もやるのじゃ。前からな」
　女が女を責める光景に魅入っていた勇は、耳にした天女の言葉の意味を理解するや、叫んでしまった。
「ええっ！　それってマズイですよっ……同意しているわけでもないのに」
　性行為は互いの身体と心を裸にして行うもの。合意なしでしていいものではなく、勇は冴から許しを得ていない。
「たわけが。お主の冴への恩返しは、冴に女の喜びを教えることじゃ。そうわしが決めた故、お主は黙って励まねばならぬ」
「そんな無茶苦茶な……」
「冴もよいな。このような巡り合わせも多生の縁じゃ。お主は見た目は若々しいが、それなりに甲羅を経ている身。そろそろ牝の喜びを知ってもいいじゃろう。勇に恩返しをさせてやれぃ」
　羞恥と快感で瞳を潤ませたセーラー服女神は、少しの間逡巡した後、小さく頷いた。
「ふ、ふつつか者ですがよろしくお願いいたします勇様……その……初めてなので優しくしていただければ……」
　意を決した風に勇に告げる。最後の方は尻すぼみだったが、勇には一字一句すべて聞こえた。
　きっと、心を開いてはいないのだろう。快感や性行為への期待ではなく、天女に逆らいきれずに承諾したように見える。
「わかりました。こちらこそよろしくお願いします」
　あまり気は進まないが、敬愛する天女に逆らうのはもっと気が引ける。
　せめて、よかったと思われるように頑張ろうと誓い、勇は冴の前に立った。
「では、ご開帳じゃ」
「え……きゃぁっ」

## 第二話　お主の恩返しは、女の喜びを教えることじゃ

天女の手がぼうっと白く輝くと、セーラー服のトップが消えた。

現れたのは、一糸纏わぬ上半身。

冴は咄嗟に手で胸元を隠そうとしたが、それより先に天女が動く。彼女の子供並みの両手首を掴み、左右に開かせる。

「や、やあぁぁ……天女さま、これでは丸見えです……」

「そうじゃな。勇がお主の可愛らしい胸元をじっくり見ておる」

雪より白い肌はシミ一つなく、絹のように滑らかだった。

アーチ状に軽く肋骨が浮く腹部は儚げだった。まるで必要最小限の骨や内蔵や筋肉の上に肉のヴェールがかかっているだけのよう。内蔵脂肪などはまったくない風に見える。

天女の肉釣り鐘を見慣れているせいか、冴のナマ乳房は一段と小振りに見えたが、それでも男の手からは微かにはみ出そうな膨らみぶりだった。

形は案の定水滴型で、清楚なふた房はさよならを言い合いながら左右に開きあっている。天女よりもツヤツヤした乳輪と乳首は大き過ぎも小さ過ぎもせず、乳房に見合ったサイズと言えた。

「恥ずかしい……この方は天女さまと気の交換をされた方……天女さまのご立派な乳房を知る男性に見られているだなんて……」

悲しそうに眉目を垂らす冴。乳房で劣等感を感じているのだろう。

「ぜんぜん恥ずかしくないですよ。冴さんのオッパイ、とても魅力的です」

勇は即座に反論した。世辞ではなく、本気でそう思う。

天女よりも劣るサイズであっても、華奢な体格や、真面目で奥手な性格にはこれ位が丁度いい。

朝露で輝くさくらんぼめいた乳肌は、触れたり舐めたりしたいと思わせる。見るからに柔らかそうな乳房は、是非とも手のひらで感触を楽しみたかった。

「冴さんのオッパイ、すごく美味しそうです。はむっ」

壊れ物に触れる心地で、勇は乳房の頂を口に含んだ。

唇で乳輪の外側にかぶりつき、口内粘膜で囲んだ乳首を舌先で軽くつつく。

相手がウブであることを忘れずに、勇はソフトに接する。

「アアっ……あああ……あはあぁ……」

天女に責められていた時のような艶声がこぼれ出す。それに比例して、豆程度だった乳首がムクムクと膨らんできた。

（反応が早い……感じ易い乳房なのかな？）

芯が入ったように硬く充血していく乳首を、勇は舌の側面で転がす。右回り、左回りと不規則に行い、舌先で上から押し潰すことも混ぜる。

「はああ、だ、ダメです、ンンッ！　はぁ……はぁ……ああ……」

天女に掴まれている手首が、魚のようにビクビク跳ねる。

頤が不随意的に何度も上がり、細い喉が無防備に晒された。

裸の上半身は徐々に桜色に染まり始め、細かい汗が浮き出している。

「いっぱい感じてくれているんですね、冴さん……嬉しいです。もっと、気持ちよくなってください」

天女と出会って一ヶ月。彼女との情事は何度も重ねてきたが、勇は受け身的だった。男性上位のプレイも行うのだが、主導権を握っているという実感はない。基本的に偉そうな天女の言動や性格、立ち振る舞いによるものだと思っている。

だが今、勇は主導権を握っている実感を感じていた。

自分が主導し、ウブな女性に性の快楽を教える喜びを味わっている。そう思うと、身体がどんどん昂ぶってくる。もっと感じさせようという積極的な感情も湧いてくる。

リードしながら搾精する具合の天女のセックスに慣れた勇には、あまり馴染みのない感覚だった。天女との情事にまったく不満はないが、こういうセックスもいいなと勇は思った。

「はあ、はぁ、はしたない声を出して……んンッ、無人とは言え……あふッ、神聖な教室で肌を露出させているのにわたしは……ああ……」

性感を感じていることは明白なのだが、冴は認めようとしないらしい。奥歯を噛みしめて快感に耐えようとしている。

だが、責めを受ける一方なのだから健気な抵抗は長続きしない。すぐに上下の唇は離ればなれになり、艶やかな嬌声が迸る。

「ん」

背後から冴を拘束している天女が、勇に目で合図をする。彼女の視線を追って勇は目を見開いた。

## 第二話　お主の恩返しは、女の喜びを教えることじゃ

冴の細い太股がもじもじと互いに擦りあっている。内股はすっかり濡れていて、汁は膝の方へと垂れていた。

「冴さん。もうこんなにぐしょぐしょにしていたんですね……」

「え……ああッ！　そんな……いや、見ないでくださいっ！」

太股を擦りあわせていたのは無意識でしていたことのようだ。はしたないことをしていたのに気づいた冴は、信じられないと言う風に悲鳴を上げた。

「お主は学問に関わるものであるというのに、教室でこんなにはしたない汁を垂らして……なんやかんや言っても、やはり牝なのじゃなぁ」

「胸を責められただけでビチョビチョに濡らすなんて……冴さんは思った以上に感じ易いんですね」

「あああ……違うんです……これは……わたしはそんな女では……！」

掠れ声で抗弁する冴だったが、天女は無視して口を開く。

「さて勇よ。こんなに昂ぶってしまっている女を放っておくのは男として不義理じゃ。鎮めてやるがよい」

勇は頷いた。

冴の状態は男で言えば、勃起したまま生殺しされるのと同じである。多少強引にしても慰めてやるべきだろう。

天女は冴を机に座らせた。勇は彼女の軽い太股を担いでスカートをめくる。湿り気たっぷりの熱波がむわんとくゆる。上昇気流に乗った甘酸っぱい愛液の匂いは、勇の顔面にぶつかり、彼女がどれだけ発情しているのかを理解させた。

「あああ……こんな格好……」

熟したトマトのように顔を赤くする冴に構わず、勇は濡れきった純白ショーツを脱がしにかかる。

腰骨に指を差し入れて手前に引っ張る。

平面的な恥丘とショーツの間が粘糸の糸で繋がっていたが、すぐに切れた。

肉の船底が解放されたことで、くゆる牝臭が濃くなっている。陰部から放たれる、まるで湯気のような熱波が勇の顔を覆う。

「これが冴さんのオマンコ……綺麗でいやらしいですね……」

「み、見ないでください……ああ、こんな……自分でもじっくり見たことなんてないのに……人間の……男の方に……！」

ショーツを足下に置いた後、陰部をまじまじと見詰める勇。
冴の陰部は、牝としては未成熟な性器だった。
ふっくらと充実した天女のものと違い、冴の大陰唇は肉付きが薄い。陰裂の幅も髪の毛ほどだった。ショーツも太股も濡らし尽くす愛液が、こんな狭いあわいから出たとはにわかには信じられない。
ウブで性器が未熟な冴は、天女と出会う前の自分に似ていると勇は思った。
だから、天女が自分を可愛がるように、自分も彼女に優しく女の喜びを教えなくてはならないと強く思う。
「いきます、冴さん。優しくしますから……どうか怖がらないで」
勇は下着毎スラックスを下ろしながら身を乗り出し、冴の前半身と密着する。
彼のペニスは天女に鍛えられたお陰で、一回り大きくなっている。適度に黒ずみが広がってきたのも、牡の器官らしい貫禄だった。
天女は誉めてくれるものの、ウブな冴が見たら怖がらせるだけだろう。そう思い、意図的に隠すことにした。
初めに胸元同士を密着させることでペニスを隠し、それから、陰裂に亀頭をあてがった。割れ目にごくごく軽くめり込ませただけだったが、それだけで冴の高い体温と愛液のぬめりが伝わってきた。
「あぁっ、熱いのが当たってる……わたしの大事なところに……！」
驚いて暴れようとした冴を、勇は抱きしめた。押さえつけると言うよりは、包み込む心地で抱擁する。そして、腰をゆっくり進め、ペニスと女壺の結合を深めた。
グジュゥゥゥゥゥゥ……。
勇のペニスがめり込んでいくと、髪の毛の幅の陰裂が冠状に盛り上がる。内部に溜まっていた愛液が押し出され、湯水のように溢れだした。
「ふぅっ……冴さんのオマンコ、キツイです……何か薄い膜のようなものが当たって」
亀頭の半分以上が埋没した頃、先端に薄肉膜の手応えが来た。感触からするに、形はドーナツ状らしい。壁と間違えそうなほど窄まっていて、真ん中の隙間は穴みたいだった。
「冴は未通……処女であるから、処女膜じゃろう。ぶちぬいてやれ勇。でないと始まらん」
勇が冴を抱きしめることでやることがなくなった天女が、後ろに下がって言ってくる。

## 第二話　お主の恩返しは、女の喜びを教えることじゃ

（ボクが……初めての男になる……女神さまの……？）

少し前までは考えられなかった状況である。一生童貞かも知れないと思っていたのに、天女と関係し、今は冴という読書少女タイプの処女を貰おうとしている。

胸が妖しくざわめいた。優しく導かねばという慈愛の感情ではなく、牝を征服することに歓喜する、獣感めいた荒い心理。

処女膜貫通を取りやめる理由のない勇は、胸中で咆哮する感情に後押しされながら、処女を征服しにかかる。

めり……メリリッッッ……。

「ふああっ……あああ、奥に入ってくる……人間のペニスがわたしの奥にいいいッ」

痛みを紛らわすためだろう、冴が勇にしがみつく。華奢な外見からは想像もつかない、だが男の膂力には及ばない力で、抱きついてくる。

未通の証を破れただけでなく、美人に強くしがみつかれる男冥利を噛みしめながら、勇は冴の処女膜を破りきった。

亀頭と膣の隙間をぬって鮮血が漏れ、冴の細い太股を伝い落ちていった。

勇は破瓜の血を纏う肉棒を、そのまま奥へと埋め込んでいく。破瓜の痛みを必要以上に感じさせないよう、これまでよりもさらにゆっくり、時計の秒針よりものろく腰を進める。

「ひぃああっ……は、入ってくる……はぁ、はぁ、ペニス、入ってくるぅぅ〜〜！」

冴の額に脂汗が滲んでいる。大きく開かれた小さな口からは荒い息がとめどない。熱い呼気は勇の顔にぶつかり、鼻穴や唇の隙間から体内へと入り込んでいく。

（なんだ……すごく気持ちいいぞ……！）

天女以上に窮屈な処女膣をこじ開けている快感も素晴らしいが、それ以上に牡として牝を圧倒している実感が快感だった。

楚々とした眼鏡美娘だった冴が、肉棒ひとつでここまで余裕をなくしている。

普段は絶対に、こんな被虐的な表情は見せないはずだ。

なのに、自分は目撃している。

そんな顔をさせているのは、他の誰でもない自分なのだ。

これこそ、牡だけが味わえる楽しみではないか。

胸の奥がゾクゾクする。背筋はまるで誰かに舐められているかのように妖しく痺れていた。

「あひぃぃンッ……ああ、お、奥にぃ……コツンってぇ……！」

破瓜の血を押し流しながら、勇のペニスは処女膣を制覇した。ふたりの肉底同士がぴったりと密着する。愛液が双方に粘り付き、微かにみじろぎするだけで卑猥な水音が起こる。

こなれた天女の膣に比べ、冴のものは仄かに硬い感じがするが、代わりに締めつけ具合は越えていた。ただ収めているだけで、食いちぎられそうな位に圧迫される。

「うああ……き、キツイ……冴さんのオマンコ、天女さまよりキツキツだ……ああッ」

天女相手に鍛えてきたつもりだったが、処女膣の快楽は度を超えていた。

強烈に締め付けられていると背筋がゾクゾク痺れてきて、腰の内側から射精衝動がこみ上げてくる。

「ほれ、じっとしとらんで動け動け。だたし、ゆっくりとじゃぞ？　呼吸を整えながらな。そうすれば長持ちする。冴の破瓜の痛みもあるから激しくは厳禁じゃ。己のチンポの味を刻み込むつもりでじっくりやってみぃ」

早くも射精寸前であることは、百戦錬磨の天女はお見通しらしい。勇は素直に助言に従い、深呼吸をしながら腰を使い始めた。

冴に痛みを与えないよう、同時に自分とのセックスの感触を刻み込むよう、蝸牛の歩速で腰を振る。

ぬる～～～～っ……にゅろ～～～～～～～。

傘のように鋭角的なカリ首で処女膣を研磨し、逆三角の亀頭の先では子宮口をぬちゅりぬちゅりとノックする。

「はああっ……はあっ……はああ……な、中で出入りして……奥に当たって……っ」

教室の時計が、抜き差しを始めてから十分が過ぎたことを示した頃、眼鏡女神の声が徐々に艶を帯びてきた。

色っぽいあえぎ声と共に女壺から愛液が分泌し、勇の往復を手助けする。時間を追うごとに摩擦快感がまろやかになり、ペニスの体温が上がっていく。

ぬるつく汁を浴びせられながら、ペニスはギュウギュウ密着してくる肉襞を擦り続ける。勇が腰を引く時には、カリ首が抱え込んできた多量の愛液が溢れだす。双方の肉船底は粘糸の糸で結ばれて、離れても繋がりが切れることはない。

抱きついているので、冴の体温の上がりぶりがよくわかる。まるでカイロのように火照

# 第二話　お主の恩返しは、女の喜びを教えることじゃ

っていた。それは、発情の証でもある。
「す、すごいっ……セックスが……しかも人間の方とのセックスがこんなにいいなんて……」
見上げてくる冴の瞳は潤んでいた。先ほどまで気乗りしていなかったのが嘘のような、熱っぽい眼差し。
「もう少し、んっ……早くしてもいいですから……はああ……もっと奥をノックしてくださいっ……ああ」
奥を突かれるのが気に入ったらしい。
素直に欲望を吐露してくれた女神に応えるべく、勇はリクエスト通りに優しく奥を叩く。
「こ、これ位でどうですか？　ぅうっ、さ、冴さんっ」
気を抜けば果ててしまいそうな快感に抵抗しながら、暗闇の中で手探りする心地で、ほんの少しだけ勢いを強める。
「も、もっといいですっ、ああ……もう少し強く突いてくださっても……」
「は、はい……ぅおおっ……！」
性器同士がグチュグチュ擦れあう音を高くし、裸の股間同士がぶつかりあう打擲音を大きく響かせる勇。肉棒が享受する快感も上がり、まるで蕩けてしまいそう。

だが、自分だけ絶頂してしまえば冴は興ざめするに違いない。天女は、どちらかだけが達した時よりも一緒に絶頂した時の方が顔が輝く。勇自身も、自分だけ絶頂させられた時よりも一緒に達した方が気持ちいいと思っていた。
なのに、自分だけエクスタシーを迎えてしまえば、初体験をいいものにしようという誓いが果たせなくなる。
勇は思い切り歯を食いしばった。
「んあああっ、いいっ、これ、いいですッ、この調子でもっとお願いしますぅぅぅ」
勇の背中に回されていた手指が爪を立て、猛烈にしがみついてくる。
小振りだが日本人らしい乳房が、牡棒を突き立てる男の胸板に押しつけられ、扁平にひしゃげる。乳肌と脂肪の柔らかな感触と高い体温が伝わってきて、肉棒を益々猛らせる。
全身全霊でしがみつかれているのを心地よく思いながら、勇は冴の子宮口を叩き続けた。
頑張りに応えるように、処女膣は断続的に収縮している。肉棒と膣ヒダの密着感が強まって、処女ヒダを引っ掻く快感が増していく。
「はあっ、はああ、いいっ、気持ちいいィィ、勇様のペニス、硬くて強くて気持ちいいで

す！」
「はぁ、はぁ、ペニスじゃなく、チンポって言ってください、ボクのチンポにオマンコ突かれて気持ちいいって、言ってください、そうするともっと気持ちよくなれますから！」
「は、はいっ、わたしのオマンコ、勇様のチンポで気持ちよくなってますッ、ああ、ほ、本当に快感があがって、ふああ、わたしのオマンコいいッ、勇様のオチンポで突かれる子宮口気持ちイイッ」
　冴のウブさを見ていたので、意味を分かって卑語を言ってくれているのかは怪しかった。しかし、雰囲気は汲んでくれたようだ。平素ならば絶対に言わないであろう淫らな単語を、情感たっぷりに叫んでくれている。
　鈴を転がしたように綺麗で、静かだがよく通る美声が淫らに裏返っているのは何とも心地いい。録音できないのが無念なほどに官能的な反転ぶりだった。
「ボクもっ、冴さんの処女オマンコを擦るボクのチンポも気持ちイイですッ、冴さんの処女オマンコ最高です！」
　天女との情事で染み込んだ台詞を冴に求めた後、勇も同様に口走る。
　はしたない言葉を連呼するセーラー服女神の膣は、快感を反映してどんどん収縮し、堪らなく狭気持ちよくなっている。これほどの締め付け快感は、天女では味わえない。
　一方で、処女膣に抱きしめられる牡棒はますます硬く膨らみ、内側から肉襞の筒を押している。隙間がないほど密着している肉竿の表面と未成熟な濡れ蜜襞は淫らな研磨音を撒き散らす。
　出入りする肉棒はすっかり愛液で濡れていて、破瓜の血はもう押し流されていた。
　牡棒を突き立てられている女壺の汁は、ふたりの太股まで濡らし、下腿に向かって垂れ落ちていた。
「ああ、身体が、へんっ、熱くって、ふわふわして……はああ、き、気持ちいいのに、これ、へんですッ！　わたし、どうなってしまうの……！」
「いいんですよ冴さん！　怖がることはないんです、そのまま身を委ねて！」
　初めての情交で絶頂しようとしているのだろう。
　未体験故に身体の反応に戸惑い、存在が消えてしまいそうな浮遊感を恐れている風に見える。冴は拠り所にしがみつくように、勇の背中に回す腕の力を強くしていた。

「い、いいんですね、このまま身を任せてっ、はあぁぁ、勇さま、信じますっ、わたし、勇さまを信じてこのままぁ……アアぁはああ……！」

すがりついてくるような声音を孕んだ、艶やかな絶叫だった。

冴はすっかり勇を信じたようで、不安そうな台詞は言わなくなった。

ふたりが最大限に密着した状態で、亀頭の穂先が子宮口にぬちょりと埋まった刹那、

「勇さまっ、い、勇さまぁあッ、ふあ、ああああ、ぁあああぁあああ〜〜〜！」

イったらしい。

勇の鼻先にあった冴の顔が、小さな口をめいっぱい開いて叫んだ。

端正な顔から真面目さが吹き飛んでいた。はしたない生の感情が剥き出しの、蕩けた牝顔へと変化している。

肉竿と密着する肉襞がビククッッッ！　と盛大に引きつった。あまりにも甘い膣振動に、流石の勇も先走り汁を漏らしてしまう。

「はあぁ……はあ……ああああ……これ……すごい……こんなの知らない……」

「それが絶頂です……はあぁ……イク、というものです……」

「これが絶頂……はあ……はあ……イク……」

冴は、好物の名前を知らされた子供のように反芻した。

「勇さまもイかれたのですか？　男の方の場合、射精するはずですが……あ、でも中にピュルピュルって何かが注がれている……？」

「冴さんをイかせるのに夢中で……はは、イきそびれました……出ているとすれば多分、カウパーです……んっ」

「ああっ、すみません……勇さまもイってください……お、お手伝いしますから……んぅっ……ンっ……」

そう言うと、冴は勇の胸元をそっと押した。性器同士を繋げたままで、冴は勇を手近な椅子に座らせた。自分は彼の腰の上で腰をくねらせ始める。

「んあ……ああ、硬い……あ、熱いっ……んふぅっ……はあぁ」

勇の肩胛骨に両手を回し、セーラースカートをふわりふわりとはためかせながら上下に腰をピストンさせる。

肉棒が充填された膣は絶頂の余波でまだ微痙攣を起こしていた。肉棒の芯まで伝わってくる振動快感は、膣ヒダを縦に擦る愉悦と結

## 第二話　お主の恩返しは、女の喜びを教えることじゃ

けにされ、どんどん追いつめられていく。
「うぁぁぁ……さ、冴さん……こ、これ気持ちよすぎ……で……す……！」
「ァああ、い、勇さまぁ……んんっ、勇さまのオチンポ……擦れて気持ちいいっ……あぁ……勇さまに射精してもらわなければならないのに……んふぅ、わたし、また気持ちよくなってきてぇ……はあアア」
紅潮する身体から細かい汗を出しながら、甲高い嬌声を放つ冴。
射精させるつもりで腰を振っていても、性器同士を擦らせていれば快感を感じぬはずはない。達したばかりだというのに、早くも声も顔も蕩けている。
表情からは学問の女神らしい知的な雰囲気は薄れ、自分の処女を奪った牡に牝として献身する喜びが表れていた。
「冴さん……ああ、冴さんっ……！」
自身のペニスに夢中になり、はしたない表情を見せる女神。
自分を絶頂させるために腰を弾ませる淫らさ。
日常生活では決して味わうことのない、牡としての悦びがこみ上げてくる。
清楚な女性の痴態を見れるのは、肉棒あればこそなのだ。処女膣を堪能できるのも逸物がなければ絶対に不可能。
ペニスを持つ男に生まれてよかったと、勇は心の底から感謝する。
「出しますよ冴さんっ！　冴さんの中に、ボクの精液射精します！」
子宮口と亀頭がヌチョヌチョと衝突する度に、甘ったるい衝撃がペニスを駆け抜ける。行き着く先はペニスの根本。奥からせり上がってくる射精欲求を膨張させていた。
「出してくださいっ、んああっ、わたしのオマンコに、勇さまの精液、いっぱい出してください！」
膣内で種汁を吐き出したい欲望が大いに刺激された。
本人の許しを得たのなら、しない理由はない。
相手は、清楚で物静かな性格を滲ませるセーラースカートの美人。自分を射精させるために、淫らに奉仕をしてくれているいじらしい娘。腰がくねると汗ばんだ乳房が魅惑的に揺れる。少女のように清楚な頂はいやらしく張りつめ、マッチ棒みたいにピンと勃起していた。
その美人の膣の処女性は自分が散らしたの

だ。牡汁を注ぎ込めば、さぞや濃厚な征服快感を味わえるだろう。

「冴さんっ、本当にいいんですね、冴さんのオマンコに、たっぷり出しちゃいますよ！」

「は、はいっ、構いません！　ンあぁぁッ、わたしのオマンコにぃ、好きなだけ注いでくださいぃぃぃ！」

ぐにゅりっっっっっ。

勇は、肉付きの薄い尻を思い切り鷲掴みする。天女とは正反対に肉のない尻タブだったが、冴の見た目や性格に似合った丁度よい尻だった。

そうして尻タブ毎、冴を抱き寄せた勇は子宮口と亀頭を密着させる。

万感の思いを込めて腰を水平にローリングさせ、散々突いてきた子宮口を抉る。

腰を一回転させるだけで目が眩んだ。下半身全部が溶けて流れていきそうな、蜜のように甘い快楽がペニスを駆け抜け背筋をゾクゾク痺れさせる。

「ああ……ぁああアアアアア〜〜〜、冴さん、チンポ気持ちいいです！　冴さんのオマンコの奥、グリグリするの、すっごく気持ちいいです！　ああ、チンポイクッ！」

「んあぁぁアアっ、はふぅあ、お、奥に、奥にコリッて、みっちゃっくしてぇ！」

冴は顎を跳ね上げてよがる。強くしがみついていた両手が力を失い、抱擁の拘束が緩む。

「がああああっ、イきます、冴さんのオマンコに、ぃぃ、ボクの精液ぶちまけます！　冴さんの処女オマンコの一番奥に、中出ししま――ッッッ〜〜〜〜〜！」

叫び、腰をもう一度回した瞬間、ペニスが強烈に突っ張った。刹那的に倍の大きさになった鈴口から、マグマのような精液が迸る。

ドビュルルルゥゥゥゥゥ！　ドビュビュビュ、ビュクククク！

「ひぅうンンンんんゥゥゥンンン！」

冴の細い背中が大きく仰け反った。そのまま背筋が折れて二つ折りになるのではないかという勢いである。

小振りな乳房が跳ね上がった。乳房に付着していた細かい汗が、百合の香りのような体臭を孕みながら飛散して、勇のシャツの胸元にシミを作る。

「で、でてるぅ、精液でてるぅぅぅ、勇さまのせーえきッ、オマンコにドクドクきてるぅ〜〜〜〜〜！」

いやらしく脈動する亀頭は白濁を放ち続ける。ドロドロで熱い濁液は天井を務める子宮

褒美としてお主を男にしてやるぞ

口に満遍なくへばりついた。
　尚も吐き出される新しい精液は逆流し、肉竿の表面と密着する蜜襞の隙間に入り込む。奥の奥まで染み込んでいくので、冴の膣には栗の花系の性臭が染み着いていく。
　冴はとうとう、勇に精液を注がれた、この世でふたり目の存在と化していた。
「はあぁ……勇さまぁ……」
　眼鏡の女神は満足そうに吐息をこぼすと、勇の胸にしなだれかかった。
（うわぁ、なんだこれ……気持ちいいぞ……スゴく気分がイイ……！）
　天女とのセックスでは、彼女に主導権を握られている。
　だが今は、確かに自分が主導権を握っているのだ。
　ウブな冴に性感を教え、そしてペニスで虜にした。無防備にもたれかかってくるのが何よりの証拠である。
　勇は牡である悦びを噛みしめながら、冴をそっと抱きしめた。すると彼女は優しく抱き返してくれる。
　その嬉しさが射精を促した。ピュッと軽く打ち出すと、冴は、アンッ、と可愛くあえぐと、にっこり微笑んでくれた。微塵も嫌な顔をしていない。それどころか、表情を明るくしてくれている。
（あぁ……男でよかったぁ……）
　椅子に座って対面座位をしている勇と冴を、天女は目尻を下げて眺めていた。

# 第三話
# 「これからこやつの尻を犯せ」

午前中は快晴だったのだが、正午頃からドス黒い雲がゆっくり近づいていた。
「天野センパイ……ちょっと付き合ってくれませんか～」
珍しくシンディが声をかけてきた。西園寺と一緒に絡んでくるのではなく、単独で話しかけてくるのはこれが初めてではないだろうかと勇は思った。
夏の定期テストを終えて帰宅しようと廊下を歩いていた時のことで、周囲には他の学生も大勢いる。
女子は眉をひそめ、男子は物欲しげな視線を向けて通り過ぎていた。そうさせているのはシンディである。
「まったく、男も女もあたしを注目せずにはいられないんだから」
流し目で学生たちの様子を伺うシンディは、誇らしそうに胸を反らした。
長い金髪を七三分けにした浅黒い肌の若娘は、今日も露出度の高い服を着ている。
レオタードみたいに肌に吸着している白いノースリーブに、ヘソ出しローライズの白いホットパンツ。太股のムチムチ度合いを見せつけながら膝上から足を覆い始めるニーソックス。そのデザインは白と黒のストライプだった。
噂によるとバストは百センチ以上、カップはＩカップなのだとか。ヒップはそんな胸と双璧で、ムチムチと後ろに突き出ている。女子が嫉妬するほど細いウェストは、胸と尻の豊満さを際立たせていた。
衣服をほぼ白で統一しているのは、自分の肌の色を考慮してのことだろう。対極にある色を用いることで、グラマラスな自分の身体を存分に見せつけているのだ。
女の自信を振りまく格好と身体つきには、シンディの性悪さを知る勇でも、股間の体温を上げさせられる。
「悪いけど用事があるから。またにしてくれませんか？」
もっとも、どんなに魅惑的な女体であっても、触れられなければ絵に描いた餅である。見るだけでも女の身体は楽しめるが、やはり思う存分触れる時の悦びには及ばない。それは、天女や冴との情事を通して学んだことだ

## 第四話　天晴れな活躍じゃったぞ。もう立派な牡じゃな

った。

（こんな人に構ってないで早く帰らないと）

勇は密かにイライラを募らせる。

テスト期間中は勉強に集中するために天女との蜜事は控えていたのだが、その分をこれから取り返すつもりだったのだ。

言葉の余韻も消えぬ間に勇は踵を返して歩き出す。すると、タックルするかのようにシンディが腕に抱きついてきた。

「わぉ。強気ぃ。あたしを堂々と振るなんて、以前のセンパイからは考えられない位に男らしいじゃない。やっぱ、女を抱くと男の自信がつくんですかぁ？」

勇は油の切れたロボットのように立ち止まった。

確かに自分は女を知ったし、以前と比べると堂々と振る舞えるようになった気がする。だが、そのことを第三者にズケズケと指摘されるのは恥ずかしく、同時に気に障る。

「そんなこと、きみには関係ないで――うわぁっ」

ムニュリッッッ。

シンディの胸は前に突き出る三角錐型。膨らんでいるというよりも、出っ張りと言った方がしっくりくる育ちようなのである。

これは釣り鐘型の天女の豊胸と同じく、欧米女優に見られるもので、乳房の理想型の一つとされている。容姿の美しさを競うコンテストで入賞する女性を見れば、どれだけ説得力のある説かは明白だろう。

そんな胸の谷間に、シンディは勇の上腕をめり込ませた。

薄い布越しに上腕を包み込む乳房。温かな温もりと弾力が伝わってくる。胸板と乳腺が発達していると垂れずに前に突き出すと言われているが、シンディの乳房はその典型で、つまりは上質の乳ではなく極上の乳であった。

上腕をくるまれているだけで、下半身がじぃんと痺れてきて、腰砕けになりかける。

脱力したのを狙い撃ちしたかのようなタイミングで、シンディは胸に挟んだ上腕をグイッと引いた。

「男らしい男にはムネがときめいちゃうわ。センパイ、はやく向こうに行きましょ」

そう言って、愛嬌たっぷりにウィンクする。

（ぬくっ……認めたくないけど……可愛い……かも……）

不覚にも心臓が跳ね上がり、抵抗心がごっそり消えてしまった。可愛いと思ってしまうと、腕に伸し掛かる魅惑的な感触もやけに甘

く思えてくる。
勇はシンディのなすがままになってしまい、廊下を引きずられていった。
乳房で上腕を固められながら連れ込まれたのは、講義室棟の隅にある無人の教室だった。
冴が初体験をした場所と同じく、小中高の教室と変わりない一室で、何故か机や椅子が散乱しているのも同じだった。
「ンフフ、ようやくふたりきりになれましたね、センパイ」
ようやく勇が解放されたのは、中央の開けた場所だった。向かい合うシンディは、婀娜っぽい微笑を浮かべている。
「こんなところに連れてきて、いったいなんだっていうんだい？　さっきも言ったけど、ボクは用事があるんだよ？」
まだ上腕に残る胸の感触を感じながら、勇が憮然として言う。
「それってぇ……彼女とセックスすることですか？」
声の粘りけが増している。蜂蜜みたいに甘ったるい美声が、聞くだけで勃起してしまいそうな艶を帯び始めていた。
シンディは鼻先まで歩み寄ってくると、両腕を勇の首に巻き付かせた。
薄い砂糖水のような甘い口臭と体臭が鼻腔に押し寄せ、勇の脳をじぃんと痺れさせる。
どこか妖しげに微笑むシンディを見ているだけで心臓が早鐘を打ち、喉がカラカラに渇いてくる。
西園寺のように、才色兼備を根拠とした自信に溢れ、それを傲慢さにしているシンディを勇は好きではない。身体つきは素晴らしいので邪な感情を覚えることはあるが、なにしろ自分の心を攻撃してくる女なのだ。セックスしたいと本気で思ったなどはない。
なのに今は、妙に引きつけられていた。
有り体に言えば、身体だけ達者な女に無性にムラムラしてしまっている。
「そ、そんなこと……きみには関係ないっていってる――」
ムギュゥゥゥ……ギュゥゥゥゥゥ。
掠れ声の反論は、途中であっけなく消えてしまう。
シンディが勇の胸元に肉の三角錐をぐいぐい押しつけてきたのだ。
勇とシンディの背丈はほとんど同じなので、至近距離から彼女の呼気が顔にかかる。溜め息じみた長めのブレスは、熱っぽくて湿り気のある息吹だった。

「うぁ……ああ……」
ふたりの着ている物は共に生地が薄いので、乳房の感触がほとんどそのまま勇の胸板に押しつけられている。
表面は柔らかいが、奥にいくほどゴム鞠のように弾力が強かった。ひょっとしたら天女以上かも知れない。正面から揉みしだいたら、さぞや気持ちがいいだろう。背後から鷲掴みにしても楽しめるに違いない。
「センパイ、あたしのオッパイどうです？センパイの女よりいいでしょ？」
首に回した細腕に力を込めて、シンディは久しぶりに会った恋人を抱擁するかのように自分の方に引き寄せた。
無骨な胸板と豊満な乳房はギュウギュウ密着する。ふたりの胸板の間では、乳房が盛り上がりながら扁平にひしゃげている。
乳房の温もりと弾力の伝導率が飛躍的に上昇し、勇をさらに昂ぶらせる。心臓は早鐘を打つ一方で、股間にはどんどん血が流入していた。
「テストに集中するために禁欲してぇ、終わったから発散させよう……そんなところだったんでしょ？　それがセンパイの言う『用事』なんですよねぇ。クスクスクス、ほんと単純な行動パターンなんだから」
慇懃さが綻び、普段投げかけられるバカにした色が濃くなってきた。
シンディは軽くガニ股になり、身体を上下に動かし始める。まるで、勇の胸元を乳房で磨いているかのような格好だった。
「はあぁ……はぁ……はぁ……こんな……ことして……どういう気なんだ……」
性格はともかく、目の覚めるような美女が淫らに身体を擦り付けてくるというのは、牡心を大いに刺激する。天女も過激なことをしてくれるが、このような下品なことはしたことはなく、それ故の新鮮さも興奮に拍車をかけていた。
下半身がカァッと熱くなり、スラックスの中でペニスが滾っているのがわかる。もう、女性に挿入可能なくらいに腫れ上がっていたとしても不思議ではない。
「んっ……んふぅ……はぁぁ……あたしのオッパイで身体を擦られているだけなのに、センパイのチンポ……すぅっごく硬くなってますよぉ……ウフフ……」
スラックスのテントは、ホットパンツの股間とも触れあっている。シンディが勇の勃起に気付かないはずはない。

## 第四話　天晴れな活躍じゃったぞ。もう立派な牡じゃな

「ねぇ、センパイ……」
身体を淫らにくねらせながら、シンディが一旦言葉を切った。ズリズリと身体が擦れあう音と、浅黒肌の美女が鳴らす甘い鼻息だけが教室に木霊する。
ズボンの中はもう、はちきれんばかりに腫れ上がっていた。
「シちゃいましょうよぉ。他の女なんか放っておいて、今はあたしと楽しみましょ。あたし、最近男らしくなってきたセンパイとオマンコしたいと思って、毎晩オマンコを濡らしていたんですよ？」
どうやらセックス目的で連れ込んだらしい。
勇の顔にはぁはぁと吐息を吐きかけながら悩ましい口調で言ってくる。身体をはしたなく上下させて、彼の牡欲を刺激しながら。
（まずい……まずいぞ……はねのけなきゃいけないのに……！）
このままでは襲われること必至である。天女に筆下ろししてもらった時のように、女性上位の体位で搾り取られることだろう。そんな雰囲気だ。
自分が襲ってしまうというのも十分あり得る。女壺に牡棒を突き立てる快感を知っているだけに、ペニスの疼きに耐えられる自信はない。
性悪の女と関係を持つなど、常識的に考えれば避けるべきことであり、天女に隠れて他の女と寝るなど裏切り行為に他ならない。
だが、身体が思うように動かない。
搾り取られるのを期待しているかのように、心臓がドキンドキン高鳴っている。見えない鎖でがんじがらめにされているみたいに、思うように身体が動かない。
「センパァイ……難しいことは考えないでぇ……あたしとオマンコしましょうねェ……」
妖しく囁いたシンディは、勇を仰向けに寝かせた。ろくに力が入らない勇はなすがままである。
ブリーフ毎スラックスを脱がされても抵抗できなかった。
「わォ……センパイのチンポ、すっごく逞しいですね……黒光りしてるところが、いやらしくて……ほんとに想像以上……見ているだけで濡れてきちゃう」
経験を重ねたペニスは、赤黒い亀頭を剥き出しにしている。一回り太く長くなった竿はココアパウダーをまぶしたように黒ずんでいて、ビクビク脈動しながら斜めにそそり立っていた。

（うわぁ……！）

彼の腰を跨いでいたシンディが、立ったままでホットパンツとショーツを脱ぐ。

仰向けの勇に見せつけ、欲望を煽るかのような所作だった。そのムッチリした太股にのろのろと衣類を滑らせた後は、前傾しながら乳房の量感を大盤振る舞いし、そして足を順番に上げて脱ぎ捨てる。

（す、すごい……悔しいけど……興奮するオマンコだ……！）

ヘアが丹念に処理された浅黒い恥丘は、汗と愛液で濡れ輝いていた。

脱ぎ払われたショーツは、勇を誘惑している内にぐしょ濡れになっていたらしく、床に放り捨てられると湿った着地音を起こした。

逆三角の胴底は天女と同じく熟れていて、たらこのように膨らんでいた。小指の幅に綻んだ陰裂からはバラ色の肉襞が顔を出している。

普段の立ち振る舞いを考えれば性交経験は豊富だろうに、恥丘にも陰裂にも、そして中の肉襞にも醜い黒ずみはなく、滑らかな色彩を放っていた。

肉棒を突き立てるのに申し分のない肉孔を目の当たりにし、勇の肉棒がビクン！　と大きく跳ねた。

「フフ、あたしのオマンコ、気に入ってくれたんですね。それじゃ、食べてみてください……センパイの女と味を比べてみてくださいね……」

シンディは妖しく微笑む。淫蕩に緩ませた碧眼で勇の目を貫きながら、不格好なガニ股になる。陰裂の綻びが広くなり、中に溜まっていた愛蜜がトロリと糸を引いて垂れ落ち、勇の腹部に着地した。

覗くバラ色の小陰唇は甘酸っぱい匂いを蒔き、勇の情欲を煽っている。ヒクヒクと脈動する様子は、獰猛な女豹の舌舐めずりを連想させた。

グチュゥッ……ジュプン！　……ズズズズズッッッ。

「うぁ……ぁああ……ッッッ！」

大陰唇と小陰唇を巻き込みながら亀頭が呑み込まれていく。船底は勇のペニスの形に沿って冠状にひしゃげている。

膣内をこじ開けて進むのは、亀頭の表面全部を厚い舌で舐められているような快感だった。

膣口に差し掛かるとカリ首で一度引っかかったが、シンディが強引に腰を下ろすとグプ

## 第四話　天晴れな活躍じゃったぞ。もう立派な牡じゃな

リと音を立てて呑み込まれた。一番太い部分の挿入が終えると、後はつっかえることなくスムーズに埋没していく。

根本まですっかり呑み込まれると、船底同士が密着した。結合部にはシンディの体重がかかっている。見た目よりも軽いものの、亀頭が子宮口にギュウギュウ押し返されているので、女に伸し掛かられている実感は十分に感じた。ボリュームたっぷりの尻タブが太股に伸し掛かっているのも心地いい。

シンディの膣内は燃えているように熱い。蜜で濡れた柔肉は吸盤みたいに吸い付いてくる。周囲から与えられる圧迫感も合わさって、裸のペニスを蜜襞で隈なく包まれる快感は強烈だった。

「んんっ……あはぁアアア……はぁ……はぁ……ああ、いいわぁ、センパイのチンポ、想像以上に気持ちいい……これで他の女をヒィヒィ言わせていたのね」

他人の玩具を奪った子供の顔で舌舐めずりをするシンディ。

勇が見上げる先では、メートルオーバーの三角錐豊胸が下乳を晒して鎮座している。仰ぎ見ると量感はひとしおで、今にも落ちてきそうだった。認めたくないが天女と比べても甲乙つけ難い魅力的な双乳である。

「ンフフ、ああ……いいわぁ……はあセンパイぃ」

シンディは覆い被さってきた。百センチ越えの弾力巨乳が勇の胸元を覆い尽くす。

グニュリッッッ、ムニュグニュゥゥゥゥゥ。

「うあああっ……おぉおお……おおオオオっ……！」

純白ノースリーブで包まれた乳房は、ふたりの胸元の間でひしゃげ、ホットケーキのタネのように腋の下からはみ出していた。

弾力が強いので、風船を潰した時と同じく外周は小高く盛り上がっている。

「ちゅっ、ちゅっ、センパイ、動いて、んふぅ、あたしの百一センチのお尻をギュッと掴んで、腰をパンパンしてくださいよぉっ」

頬や唇にキスの雨を降らせながら、シンディはのったりと腰をくねらせる。

快感を貪ると言うよりは、牡を焦らしてその気にさせるような所作だった。

締め付けられる肉棒を膣ヒダでゆったり擦られるのは、心地いいが物足りない。ぽってりした唇で頬や唇を押される快感がペニスの焦れったさを大きくする。濡れた牝孔を掻き回す快楽を知っているだけに、思い切り腰を

振りたくて堪らなかった。
「せ～んぱいっ、ちゅむっ」
シンディは顔を右へ左へと傾ける。様々な角度からアプローチし、唇同士を最大限に密着させながら、勇の唇の隙間に自分の舌をねじこんでいた。快感で痺れていた勇の舌に、シンディの舌がぬるりと絡む。
「れろれろ、ちゅる、チュム～ッ、んくんく、ほら動いてぇ、いっしょに気持ちよくなりましょうよぉ」
舌の表面全部を使い、勇の舌を舐め回す。シンディは鼻をスンスン鳴らしながら、勇の舌に自分の唾液を塗りたくり、自分の舌の触れ心地を刻みつける。
舌を舐め終えると、今度は口内を蹂躙し始めた。歯茎や歯に自分の感触を擦り付け、吸い込んだ唾液を音を立てて嚥下する。
「セェンパァイぃ……ベロベロ、チュッチュッ、ゴクッ、はやくぅ～、レロレロッ」
急かすシンディの声が脳に響いてくる。
繰り広げられる濃厚なキスは、のったりした腰振りと結託して勇の自制心をどんどん削りとっていた。
シンディの声に従いたい気持ちが強くなっている。何のために自分が我慢しているのかわからなくなり、女壺を楽しみたいという欲望が膨れ上がっていた。
（ああっ……ああああ……もう我慢できない……！）
天女のことは頭から吹き飛んでいた。
遂に勇は、欲望のままに振る舞い始める。
パンッ、グジュッ、パンッ、ヌジュッ、パンッ、パンッ、パンッ！
相手が嫌な女であることも忘れ、快楽欲しさに奔放に腰を突き上げる。
頭にあるのは、目の前の上等な牝を抱いて快楽を貪ることだけだった。
「アンッ、いい、センパイ、もっと、もっと突いてぇ、ベロベロ、ムチュッ、レロレロ、んくっ、ぶちゅっ、ぶちゅっ、あたしのオマンコ、ジュボジュボ突いてェ！」
シンディはしつこくキスをしながら迎え腰を打つ。ボトムレスの女体が尺取り虫のように波打ち、弾力の強い乳房がむにゅむにゅぐにゅぬぐにゅと押しつけられる。
乳首はすっかり勃起して、親指の先ほどにも膨らんでいた。薄布を挟んで勇の乳首と擦れあうと、甘ったるい快感電流が彼の背筋を駆け、ペニスの充血度合いがグンと上がる。
ムギュゥゥゥ、ムニムニ、ムギュギュギュ。

## 第四話　天晴れな活躍じゃったぞ。もう立派な牡じゃな

握力の限り握る尻タブは柔らかく、揉んでいるだけで勃起ペニスに力が漲る。
離れては引き合う結合部からは愛液の滴が飛散して、教室の床を濡らしていた。
ふたりの股間はすっかり濡れていた。ムッチリした褐色の太股や、白と黒のニーソックスにも蜜の飛沫は飛んでおり、甘酸っぱい愛液の匂いの発生源と化している。
「ああン、センパイ、もうイきそうなのね、いいわ、あたしの中にいっぱい出してぇ、センパイのザーメンであたしのオマンコ、ドロドロに染めあげてェッ！」
やはりセックス慣れしているらしい。シンディは、膣で触れているだけでペニスが射精間近であることを看破した。
膣内射精を懇願する声音は春先の雌猫を彷彿とさせる。鼻持ちならない金髪美女が、バカにしていた男のペニスで絶頂に達しようとしていることが丸わかりだった。
そして、見下していた男の精液で膣を征服されることを求めている。
「おおおォォォ、出すよ中に……思い切り出すからねッ！」
腫れた亀頭で降りてきた子宮口をドスドス突きながら、猛然と腰を振る勇。

禁欲生活でたっぷり溜まった精液を、褐色美女の膣に放つことしか頭にない。柔らかくてキツイ、この上質の膣の中で射精を行うことが勇の望む全てであった。
シンディも息を合わせて腰を振る。艶めかしい呼吸を勇の顔にぶつけながら執拗にキスをし、絶頂の瞬間に向かっている。
「はあぁンッ、ああ、あああっ、イクッ、ああ、センパイに奥っ、奥、抉られてイクゥゥゥ！」
勇は子宮口と亀頭を密着させ、腰をグラインドさせた。
膣内が淫らな痙攣を起こし、食いちぎるかのようにペニスを締め付けてきた。
勇は歯を食いしばりながら子宮口を抉り続け、自身も亀頭を昂ぶらせる。
ふたりは汗みずくになり、獣のように呼吸を荒げあった。そして、勇が十回目のグラインドを行った瞬間、
「もうだめぇ～～～、イクイクイクッ、オマンコイク、イックゥゥゥッゥゥウウウ～～～～～～！」
天女からは聞いたことのない、下品で思い切りのよすぎる嬌声だった。
シンディは背筋を仰け反らせ、乳房をブル

ンッ！　と弾ませた。一拍遅れ、長い金髪が宙をふわりと舞う。
　絶頂させたお返しとばかりに膣が猛烈に締まり――、
「うぅクゥウウウウ！　チンポイクゥッッッ！」
　ドビュ～～～～～！　ドブブッ！　ドビュンンンンン！
　亀頭が子宮口に嵌まり込んだ状態で、勇は精を放った。
　天女と冴にも注いできた精液が、シンディの子宮口にへばりつく。誘惑してきたふしだらな女を、膣内射精した三人目の女に仕立て上げる。
　最奥を白濁で染め抜いても射精はやまない。とめどなく注がれる汁は逆流し始めた。肉棒を締め上げながら緩やかに痙攣している蜜襞の隅々に、勇の牡エキスが染み渡る。
「くふぅぅン！　すごいっ、このザーメンあつぅいィィィ、はぁああ……！　ドロドロしてぇ、あたしのナカぁ、ザーメンくさくしてるゥウウウ！　ザーメンくさくなってるオマンコ気持ちいいィィ！」
　見下していた男の体液を注がれているというのに、シンディは喜悦の声を絶やさない。
　聞くだけで射精してしまいそうな恥声を叫ぶ。一旦離れた胸が、細腰と一緒に勇にグイグイ押しつけられる。
　伸し掛かってくる肌触りと体重が、上質の牝に求められている実感を強める。
　いつまでも射精したくて堪らなくなり、勇は握る尻タブを引き寄せながら子宮口と亀頭の密着度合いを高め、そして精液を注ぐ。
　嫌悪していた女に膣内射精しているというのに、快楽は天女たちを抱いた時に勝るとも劣らず、勇は夢見心地で悦楽を貪った。
「くッ……はー、はあぁつ……もっと……もっと出すぞぉ……んくあっ……ああ、全部、注ぐ……はぁ……んあああッ……！」
「あはぁン……いいわぁ、もっとちょうだい！　センパイの精液、力が漲っていて、すっごくおいしいのォ、たくさん注いでェ！　あるだけ、ちょうだいッッッッッ！」
　シンディに哀願されるまま、勇は気を失うまで精液を注ぎ続けた。
　窓の外では雨がパラつき始め、たちこめる黒雲がどしゃぶりを予告していた。

**※この体験版はここで終了です。**
**続きは製品版でお楽しみ下さいませ。**

褒美としてお主を男にしてやるぞ

第四話　天晴れな活躍じゃったぞ。もう立派な牡じゃな